

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12579

研究課題名（和文）高校生の認知行動療法によるレジリエンスを高める感情統制教育プログラムの開発と検証

研究課題名（英文）Development and verification of an education program for emotional control to improve resilience in high school students by using cognitive behavioral therapy

研究代表者

石田 実知子 (Ishida, Michiko)

川崎医療福祉大学・保健看護学部・講師

研究者番号：10776008

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、高校3年間の怒りに対する対処行動の縦断調査により、「状況分析」「援護要請」「逃避」は、変化せず、1年次当初に「暴力」による対処をしていない者も学年進行に伴い増加量が大きくなること、第二に、激しい怒りを喚起させる出来事に対し、暴力に繋がると推察される認知が大半を占めること、第三に、激しい怒りを感している友人へのサポートでは、【対象者の理解】など7カテゴリについて困難さを認知していることが明らかとなった。以上の結果を踏まえ、認知行動療法を援用しプログラムを開発した結果、ストレスのメカニズムの理解は、介入直後および介入1か月後、怒りに対する対処行動の内援護要請は介入1か月後に有意に改善した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プログラムによる介入により、ストレスのメカニズムの理解に繋がると同時に、援護要請行動の増加により、暴力行動予防が期待できるプログラムであることが明らかとなった。プログラムの中で、呼吸法や筋弛緩法をベースとし、ストレス状況下に直面した時、すぐに実践できるよう、SSTを取り入れ、認知・行動の変容ができる取り組み方法を提示できた。加えて、複数の高校において、プログラムを実施するとともに、高校保健ニュースなどを通して暴力行動に繋がるストレス低減に向けた予防の重要性について生徒および教職員、保護者に対し広く発信した。

研究成果の概要（英文）：First, A three-year longitudinal study on anger coping behaviors of high school students indicated that “situational analysis,” “help-seeking,” and “escape” remained unchanged. Students that did not use “violence” at the beginning of the first year used violence more often as their grade level increased. Second, recognizing most incidents evoking intense anger resulted in violence. Third, participants recognized seven categories of difficulties in supporting friends feeling intense anger, including [understanding the target person], among others.

We developed a program using cognitive behavioral therapy based on the above results. As a result of the program, the understanding of “stress mechanisms” improved significantly just after the intervention and one month later, and “help-seeking” improved significantly one month after the intervention.

研究分野：精神看護学

キーワード：暴力行動 感情統制 援護要請 高校生 認知行動療法

1. 研究開始当初の背景

近年、高校生の健康に関わる現代的な課題として、自傷・他害などの自他への暴力行動が極めて重大な問題となっている。また、問題行動の背景には、怒りの感情など、感情統制することへの困難さが窺え、社会問題となっている。さらに、自傷・他害、非行などの反社会的行動は自殺と密接に関連していることが明らかにされ (Kerfoot et al, 1996) 自殺総合対策大綱にも思春期・青年期への対策として、生活上の困難・ストレスに直面したときの対処方法を身に付けさせるための教育を推進すると明記されている。特に対人ストレスは、その他のストレスよりも、より強いネガティブな影響力を有しており (高比良, 1998) 様々な精神病理の在り方を大きく左右するといわれ (Segrin, 2001) ている。これらの問題に対するアプローチとして近年、ストレスの防御因子やその反応を軽減させるとされる「レジリエンス」が着目されており、その質は発達に伴い変容していくと考えられている (平野 2010) 。

また、精神的不調に対するアプローチとして効果が実証されている認知行動療法 (國方 2013) においてもストレングスペースのレジリエンス促進に向けた手法への移行が提唱されている (Fredrike Bannink 2012) 。

しかし、高校生を対象としたものは限られ、自他への暴力行動をも想定した発達的变化を考慮した学校現場で活用可能な「感情統制教育プログラム」は整備されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高校生の暴力行動予防をねらいとし、ストレングスペースの認知行動療法によるレジリエンスを高めるための「感情統制教育プログラム」の開発と検証することである。

3. 研究の方法

(1) 高校3年間を通して怒りに対する対処行動の集団および個人の発達的变化についてパネル調査を実施し、共分散構造分析を用いて検討した。また、高校1年生から3年生を対象に(2) 激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知(3) 激しい怒りを感している友人をサポートする際に高校生が感じる困難さについて自由記載による質問紙調査を実施し、内容分析を用いて検討した。(4) 以上で得た結果を基に「感情統制教育プログラム」を開発し、(5) 開発したプログラムの有効性について量的に検証した。

4. 研究成果

(1) 高校3年間を通して怒りに対する対処行動の集団および個人の発達的变化

高校3年間にわたり怒りに対する対処行動について、潜在成長曲線モデルによって検討することを目的とした。その結果、「状況分析」「援護要請」「逃避」の傾きの分散が有意でないことが示されたため、これらの変化量には個人差がないことが明らかとなった。一方、「暴力」の傾きが有意傾向であり、共分散が負であった。この結果は、暴力は個人差があり、1年次の暴力による対処行動得点と3年間の暴力による対処行動得点には負の関連があることを示している。

以上より、「状況分析」「援護要請」「逃避」については、心理的な介入をしない限り変化しないことが示唆された。「暴力」については、柔軟に変化するものの、1年次に暴力による対処行動を行わない者ほど学年進行に伴い増加量が大きくなることが推察された。今後、怒りに対する適切な対処行動推進に向けた、早期の介入が喫緊の課題であることが示唆された。

(2) 激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知

高校生の激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知として【他者への非難】【報復】【投げやり】【悔恨】【自己否定】【絶望】【自己制御】【対応の模索】の8カテゴリが抽出された。これら

の8カテゴリは、認知のタイプから、他者帰属認知【他者への非難】【報復】、自己帰属認知【投げやり】【悔恨】【自己否定】【絶望】、自己統制的認知【自己制御】【対応の模索】の3つに分類された。その内、他者帰属認知、自己帰属認知が9割以上を占め、男女間比較では他者帰属認知は男子が有意であり、自己帰属認知、自己統制的認知は女性が有意であった。

以上より、高校生に対して、これら8つのカテゴリの認知および性差を踏まえた認知の変容に向けた支援が望まれた。

(3) 激しい怒りを感じている友人をサポートする際に高校生が感じる困難さ

高校生は、激しい怒りを感じている友人をサポートする際に、対象者が<自分の考え方と違うこと><対象者の特性を知ること>による【対象者の理解】に困難さを認知していた。また、サポート提供者が自分自身の感情を抑えるなどのサポート行動の前提となる【自己のコントロール】に困難さを認知していた。加えて、サポート提供者は、対象者の【サポートの受け入れ】に困難さを認知していた。サポート行動の実施では、サポート提供者は、対象者に【声掛けすること】や、対象者と<接すること><傾聴すること>などの【受容的な対応をすること】や、対象者を【落ち着かせること】への困難さを認知していた。また、対象者に【的確なアドバイスをすること】への困難さを認知していた。以上から、激しい怒りを感じて困っている友人へのサポート行動は、【対象者の理解】【落ち着かせること】【声掛けすること】【的確なアドバイスをすること】【サポートの受け入れ】【受容的な対応をすること】【自己のコントロール】といった面に困難さを認知しながら行われていることが推察された。

以上より、今後これら7つのカテゴリの困難認知を踏まえた上で、怒りが生じている高校生に対する友人によるサポート提供の促進に向けて、安全かつ効果的な取り組みを行っていくことが喫緊の課題であると考えられた。

(4) 「感情統制教育プログラム」の開発

介入時期：研究結果(1)により、「暴力」は柔軟に変化するものの1年次に暴力による対処行動を行わない者ほど学年進行に伴い増加量が大きくなることが推察され、早期の介入が望まれた。学校のカリキュラムを勘案するならば、1学期の介入が望まれるものの、1年次は入学後間がないことによる緊張があることを考慮し、学校生活に馴染んだ2年次1学期当初に実施することとした。

介入内容：研究結果(2)(3)により、1年次に暴力による対処行動を行わない者ほど増加量が大きくなることが推察された。また、激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知である【自己否定】【絶望】【他者への非難】【報復】など暴力に繋がると推察される認知が大半を占め、これらの認知は自他への暴力行動に繋がる認知とも推察され、これらは自殺との関連性も指摘されている(松本ら, 2009)。このため、困ったとき他者に安心して助けを求めたり相談できること、加えて助けを求められる側の持つ力量が問われる。研究成果(1)によると援護要請は心理的介入を行わない限り変化がみられないことが推察されることから、レジリエンスの関係構築力を基盤とし、援護要請の向上に主眼をおくと同時に、激しい怒りを感じて困っている友人へのサポート行動(援護要請)における困難感に配慮したプログラム内容とした。第二に、レジリエンス向上に向け、先行研究(石田ら, 2018)により、レジリエンスの要素の中で精神的健康と正の関連のあった、関係構築力と克服力を高める内容とした。また、認知が行動や気分、身体に影響を与えていることから、認知行動療法の考え方を援用し、心理教育や筋弛緩法や呼吸法を毎回行うことが有用であると考えた。

以上より、「感情統制教育プログラム(以下プログラム)」を構築した。プログラムは、学校での実現可能性を考慮し、2週間に1回、全3回で構成した。毎回介入の前後で筋弛緩法

や呼吸法によるリラクゼーション法を実施し、認知行動療法の基本モデルを用いて心のしくみについて心理教育を実施した。また、先行研究をもとに激しい怒りを感じる出来事を取り上げた場面を想定し、SST（ソーシャルスキルトレーニング）を実施するとともにワークシートを用い、視覚化できるように工夫した。1回目は心理教育としてストレスのメカニズムの理解とストレス対処法、2回目は怒りに対する感情統制、3回目はストレンクスと援護希求行動の強化を目的に1回45分の介入を実施した（図1）。

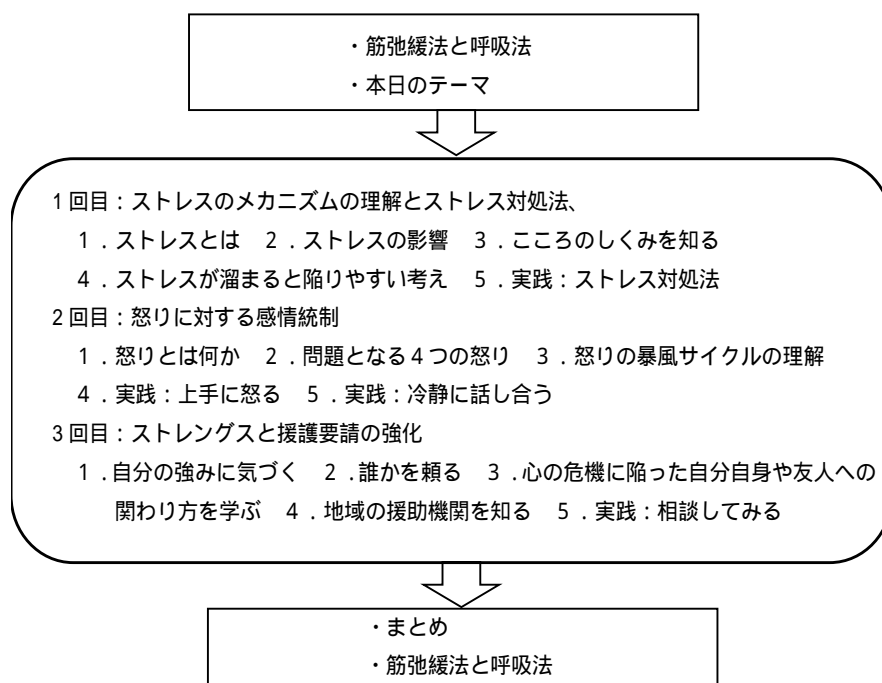


図1. 「感情統制教育プログラム」

(5) 「感情統制教育プログラム」の有効性についての検証

本プログラムが実践的に有効性であるのかについて高校2年生男女34名の研究参加者に4月下旬より2週間毎に3回実践し、介入効果を検証した。プログラムの介入前後および介入1か月後の介入効果の測定では、1回目の介入直前（以下：介入前）、2回目の介入直後（以下：介入後）、3回目の介入終了1か月後（以下：1か月後）の計3回、ストレスのメカニズムについての理解度（以下：ストレス理解）、対人ストレス認知、怒りに対する対処行動（援護要請、状況分析、逃避、暴力）、レジリエンスについて測定した。その結果、ストレス理解は、介入前と介入後の比較では介入後が有意に高く、介入前と1か月後の比較では、1か月後が有意に高かった。また対人ストレス認知は、介入前と介入後の比較では介入後が有意に低く、1か月後は、介入前と有意な差が認められなかった。さらに、怒りに対する対処行動の内、援護要請は、介入前と介入後の比較では有意な差が認められなかったが、介入前と比較すると1か月後は有意に高くなっていた。その他、状況分析、逃避、暴力については、介入前、介入後、1か月後で有意な差は認められなかった。また、レジリエンスについても介入前、介入後、1か月後で有意な差は認められなかった（図2～8）。

以上より、本プログラムは、暴力行動（自傷行為・他害行動）そのものの低減は認められなかったが、ストレスのメカニズムの理解、援護要請の増加が認められたことから暴力行動予防に役立つ可能性が推察された。しかし、対人ストレス認知は、介入前と比べて一旦介入後に低下したものの、1か月後には介入前に戻っていることから、今後フォローアップを定期的に行うなどの取組が必要であると考えられる。レジリエンスは、介入後直ちに改善しない可能性もあることから今後は長期的に介入効果の測定を行っていくことが求められる。

1. ストレス理解 (得点範囲 6 点 ~ 30 点)

得点が高いほどストレス理解度が高い

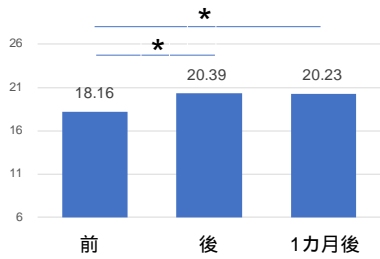


図 2. ストレス理解の介入前後・1 か月後の比較

* p<.05

2. 対人ストレス (得点範囲 0 点 ~ 40 点)

得点が高いほど対人ストレスが高い

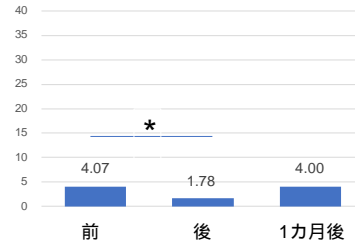


図 3. 対人ストレスの介入前後・1 か月後の比較

* p<.05

3. 怒りに対する対処行動 (得点範囲 4 点 ~ 20 点) 得点が高いほど各対処行動をとることが多い

援護要請

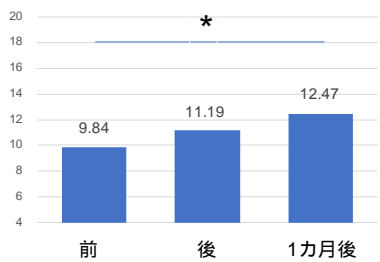


図 4. 援護要請の介入前後・1 か月後の比較

* p<.05

状況分析

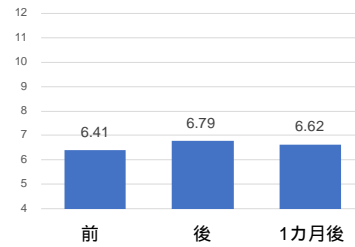


図 5. 状況分析の介入前後・1 か月後の比較

逃避

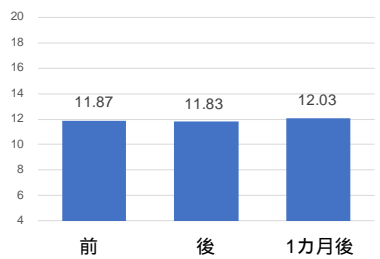


図 6. 逃避の介入前後・1 か月後の比較

暴力

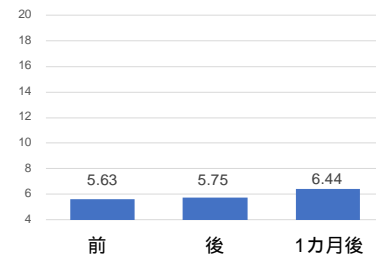


図 7. 暴力の介入前後・1 か月後の比較

4. レジリエンス (得点範囲 9 点 ~ 45 点)

得点が高いほどレジリエンスが高い

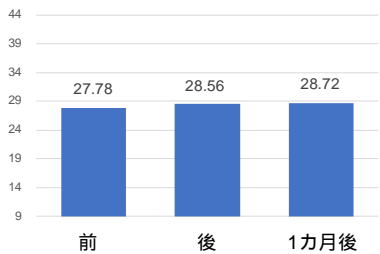


図 8. レジリエンスの介入前後・1 か月後の比較

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 井村亘、石田実知子、渡邊真紀、大森大輔、小池康弘	4. 巻 78 (4)
2. 論文標題 中高校生幸福感受イベント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 325 - 333
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井村亘、山形真由美、渡邊真紀、石田実知子	4. 巻 36 (2)
2. 論文標題 激しい怒りを感じている友人をサポートする際に高校生が感じる困難さ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 5 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田実知子、井村亘、江口実希、渡邊真紀、國方弘子	4. 巻 66(13)
2. 論文標題 高校生における自傷行為の経験率における性差の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 厚生指標	6. 最初と最後の頁 36 - 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田実知子、	4. 巻 67 (1)
2. 論文標題 高校生の自他への暴力に対するレジリエンスと反すうおよび怒りとの関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 33 - 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井村亘、石田実知子、渡邊真紀、小池康弘	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 高校生の精神的健康に対する怒りを喚起場面における対人ストレスと友人サポートの関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川崎医療福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 315 - 322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhiro Koike, Michiko Ishida, Wataru Imura, Maki Watanabe	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 Examination of the Robustness of the Resilience Scale using Multigroup Analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kawasaki medical welfare journal	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井村亘、石田実知子、渡邊真紀	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 高校生の精神的健康に対する教師サポートとレジリエンスの関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田実知子、江口実希、國方弘子	4. 巻 35(2)
2. 論文標題 思春期用自他への暴力行動尺度の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田実知子, 井村巨, 小池康弘, 江口実希, 渡邊真紀, 國方弘子	4. 巻 17(3)
2. 論文標題 高校生における怒りに対する対処行動の経時的変化 潜在曲線モデルを用いた検討ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江口実希, 石田実知子, 國方弘子	4. 巻 17(4)
2. 論文標題 ネガティブな反すうが自尊心、認知の偏り、抑うつ気分に与える影響の検討ー中学生・高校生のデータからー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田実知子, 小池康弘, 井村巨, 渡邊真紀	4. 巻 60(5)
2. 論文標題 思春期への汎用性を備えた短縮版気分尺度の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 268-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田実知子, 井村巨, 渡邊真紀, 江口実希, 小池康弘, 山形真由美, 國方弘子	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 思春期の怒り喚起場面における友人によるサポート知覚尺度の開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井村 亘, 渡邊真紀, 石田実知子	4. 巻 59 (5)
2. 論文標題 高校生の自傷行為に対する教師サポートと対人ストレスの関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 348-354
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊真紀, 石田実知子, 井村 亘, 小池康弘	4. 巻 27 (2)
2. 論文標題 高校生の精神的健康に対する教師サポートと対人ストレスおよび怒りへの対処行動の関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 川崎医療福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 441 - 447
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小池康弘, 石田実知子, 井村 亘, 渡邊真紀	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 高校生対人ストレス尺度の項目特性および因子不変性の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 37 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ishida, Mayumi Yamagata, Maki Watanabe, Wataru Imura	4. 巻 13 (4)
2. 論文標題 Factorial invariance of Resilience Scale	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Japanese Journal of International Nursing Care Research	6. 最初と最後の頁 1 - 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ishida, Hiroko Kunikata, Imura, Maki Watanabe, Miki Eguchi, Kyoko Namikawa	4. 巻 26
2. 論文標題 Self-Harm Behaviors Among Japanese High School Students: Chronological Changes at the Individual and Group Levels in a Provincial City Area of Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kawasaki Medical Welfare Journal	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 石田実知子、江口実希、國方弘子
2. 発表標題 高校生の認知の偏りが怒りを通して自他への暴力行動に与える影響
3. 学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小池康弘、石田実知子、井村亘、渡邊真紀
2. 発表標題 高校生における対人ストレスとレジリエンス、精神的健康の関連
3. 学会等名 第53回日本作業療法士学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michiko Ishida, Miki Eguchi, Hiroko Kunikata
2. 発表標題 Developmental changes in self-harm behaviors investigated in a three-year follow-up survey using the latent growth curve model
3. 学会等名 International Council of Nurses Congress2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuhiro Koike, Michiko Ishida, Wataru Imura, Maki Watanabe
2. 発表標題 Gender differences in resilience components among high school students
3. 学会等名 TOTA 2019 Annual Meeting and International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Wataru IMURA, Michiko ISHIDA, Maki WATANABE, Yasuhiro KOIKE
2. 発表標題 Correlations Between Interpersonal Stress on Mental Health for High School Students and Support by Friends in Anger Situations
3. 学会等名 TOTA 2019 Annual Meeting and International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田実知子、江口実希、國方弘子
2. 発表標題 高校生の暴力行動に対するレジリエンスと反芻および怒りとの関連
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江口実希、石田実知子、國方弘子
2. 発表標題 中学生、高校生の反すうが、自尊心、認知の偏り、抑うつ気分に与える影響
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田実知子、井村亘、渡邊真紀、小池康弘
2. 発表標題 精神的健康に対する怒り喚起場面での友人によるサポート知覚と怒りに対する対処行動との関連 高校生を対象とした予備的研究
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井村 亘、渡邊真紀、石田実知子、小池康弘、大森大輔
2. 発表標題 女子中学生の幸福感受イベント頻度とポジティブ気分およびネガティブ気分との関連
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊真紀、石田実知子、井村亘、小池康弘
2. 発表標題 精神的健康に対する怒り場面における友人からのサポート期待と対人ストレス認知との関連 - 高校生を対象とした予備的研究 -
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田実知子、江口実希、國方弘子
2. 発表標題 中学生・高校生における自尊心と自他への暴力行動との関連
3. 学会等名 日本看護研究学会中国・四国地方第32回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江口実希、石田実知子、國方弘子
2. 発表標題 ネガティブな反すうは、なぜ避けるべきか？ - 抑うつ気分に関連する要因の検討から
3. 学会等名 日本看護研究学会中国・四国地方第32回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田実知子、塚原貴子、小池康弘、渡邊真紀、井村亘、山形真由美
2. 発表標題 高校生における友人の怒り体験におけるサポート行動の傾向
3. 学会等名 日本学校保健学会第64回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田実知子、小池康弘、井村亘、渡邊真紀、山形真由美、塚原貴子
2. 発表標題 高校3年間の時間の変化が対人ストレス、怒りに対する対処行動、精神的健康およびレジリエンスに及ぼす影響
3. 学会等名 日本学校保健学会第64回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田実知子、山形真由美
2. 発表標題 激しい怒りを感じている友達への高校生のサポート行動に対する困難感
3. 学会等名 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井村 亘, 渡邊真紀, 石田実知子, 小池康弘, 大森大輔
2. 発表標題 中学高校生における幸福感受ライフイベントの検討
3. 学会等名 第30回岡山県作業療法学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江口 実希 (Eguchi Miki) (40631718)	神戸常盤大学・保健科学部・講師 (34535)	
研究分担者	國方 弘子 (Kunikata Hiroko) (60336906)	香川県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (26201)	
研究分担者	小池 康弘 (Koike Yasuhiro) (00805070)	川崎医療福祉大学・医療技術学部・助教 (35309)	
研究分担者	塚原 貴子 (Tukahara Takako) (10155335)	川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授 (35309)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	井村 亘 (Imura Wataru)	玉野総合医療専門学校・作業療法学科・専任教員	
研究協力者	渡邊 真紀 (Watanabe Maki)	玉野総合医療専門学校・作業療法学科・専任教員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関